

知能優秀児のパスナリテイ

特性に関する一実験的研究

—— ロルシャッハ法による ——

乾 原 正

一 問題と目的

天才についての問題は古くから諸家によって討究せられてきたところであるが、それらに共通する点は、「天才と狂気」と云われる程、天才人には異常な精神病理的特性を示すものが少なくないことである。⁽¹⁾ 過去の歴史を振り返ってみても、天才人のわれわれに寄与した役割は決して少ないものではないし、又将来に対する期待も大なるものであるだけそれだけ憂慮しなければならない問題と云わねばならない。

ここに知能心理学の発展により知能の個人差が明らかとなり、知的水準が容易に比較せられるようになって、知能優秀児の研究に一つの分野が開かれた。

ターマン Terman, L. ウィットネイ Witky, P. A. ホルネンヌ Hildreth, G. ⁽²⁾ 等が知能優秀児に観察法、品等スケールなどを用いてその特性を明らかにした。しかるに知能優秀児は知能だけでなしに、他の諸面においても優れて

知能優秀児のパスナリテイ特性に関する一実験的研究

いることを実証した。

我国においても、大伴⁽⁵⁾、鈴木⁽⁶⁾、森らによって研究せられてきたけれども、知能天才児乃至優秀児が多く、普通児よりも優れていると述べている。

以上の如き知能優秀児の研究は、天才人のもつ特性と殆んど全く矛盾するものである。かかる相異は研究対象の相異や研究方法の相異もさることながら、知能優秀児の成長過程における人格の変容という問題をも包含しているものと考えられる。特に身体的・社会的に顕著に成人化する青年期に多くの問題を蔵していることは容易に推察し得る。このことは大伴の強く指摘するところである。

いづれにしても知能優秀児の力動的なパスナリティに関する研究はまだ十分なものといえないが、特に青年前期における知能優秀児のパスナリティに関する研究の意義と価値を認めなくてはならないであろう。しかるに本研究は知能優秀児の包蔵せる諸問題を説明すべく、従来殆んど試みられていない、投影法即ちロールシャハ法を用いて心理学的・精神医学的に知能優秀児の力動的なパスナリティを明らかにし、その特異性を究明しようとするものである。

二 実験と結果

本研究の結果は兵庫県下の某私立中学校における、田中B式知能検査結果から表1の如き実験群を得て、ロールシャハ個人法を用いて実施し得たものである。その整理はクロッパ・Klopper, Bを主とした関学法にもとづいた。

三 発掘と考察

主要カテゴリーの結果を次に示す。表中の \bar{x} は $\bar{x} = \frac{\sum x_i^2}{N}$ 、 s^2 は $s^2 = \frac{\sum (x_i - \bar{x})^2}{N-1}$ により求めたもので、各々平均値及び不偏分散値を表わしたものである。

発掘1 本実験児群は積極的な生産態度を示し、抽象的なものへの適応の強調がみられる。

結果に見出される反応総数Rは児玉規準の同年令児群における反応総数24より高く、成人のそれと変わらないものを示し、拒否的、自己表現をさうう態度を示すようなRの貧困はみられない。このようにRが豊富であるということは、解釈上重要な鍵である被験児の自由な表現を得たことになり、本研究の目的に添うものである。

実験群

(表1)

群	人数	I. Q			
		最低	最高	平均	S. D.
G I	24	122	130	126.0	2.5
G II	8	132	140	136.4	3.2
G III	10	141	175	153.1	12.4
計	42	122	175	134.4	12.9

(表2)

各群別・主要因子反応の平均値及び分散値

	R	W	W%	D	D%	F	F%	F ₊	F ₊ %	M	FM	A	A%	H	H%
G I	33.0	18.0	60.9	10.5	27.6	17.9	51.5	13.6	77.6	2.3	4.8	14.5	45.0	6.0	18.3
G II	198.8	67.0	744.9	93.4	340.3	145.2	400.9	68.5	418.8	2.5	18.8	41.3	161.9	13.0	80.6
G III	31.8	13.5	43.8	10.9	34.8	19.9	65.4	15.4	78.4	1.9	6.3	13.1	45.7	4.0	13.4
計	125.0	108.0	799.2	52.7	330.1	73.0	216.7	77.1	3.8	24.0	16.4	206.4	8.0	133.6	
G I	30.5	11.4	39.7	14.1	45.6	18.4	59.7	15.9	89.1	3.0	2.9	14.2	47.7	5.7	19.2
G II	38.5	40.3	620.8	37.0	295.6	49.4	503.8	30.5	74.1	4.9	3.6	27.7	298.7	11.5	128.1
G III	32.0	15.6	52.6	11.4	33.3	18.4	56.1	14.5	80.5	2.4	2.8	14.2	45.8	5.5	17.6
計	142.5	72.5	747.0	71.8	367.5	104.0	418.2	54.3	290.3	3.3	6.8	32.3	187.2	12.0	100.8

(表3)

	R			計
	G I	G II	G III	
11—15	2	1	0	3
16—20	3	0	0	3
21—25	5	3	2	10
26—30	2	0	4	6
31—35	2	1	2	5
36—40	4	1	1	6
41—45	0	1	1	2
46—50	3	1	0	4
51—55	2	0	0	2
56—60	0	0	0	0
61—65	0	0	0	0
66—70	1*	0	0	1
計	24	8	10	42

とよって明らかにすべきものである。

発掘・2 本実験児群の顕著な特徴の一つに「W」反応が多くみられ、総合的、抽象的な思考形式をとる傾向がうかがえる。

全体反応 (W) 及び同% (W%) の平均値について比較すると児玉規準の同年令児群反応数7〜8、同23%に比し二倍の高値を示し、成人を上回る成績を示している。

これを各群別にみると、WについてはG群が他の二群と比べ分散が小さく、G^{II}との分散比 $\frac{w^2}{g^2}$ に有意の差が認められた。W%についてはG^{III}・G^I・G^{II}群という順序で高く、G^{III}群とG^I群との間には $\frac{w^2}{g^2} = 1.20$ 、 $t_0 = 2.11$ で有意の差が認められた。

一般に全体反応は連想活動の活潑さ、綜合力、抽象的思考の形式を表わすと共に知的水準の高低を示す記号とされておりその質が考慮されるが、クロッパは(Ⅰ)W% < 30%で良形態のもの、(Ⅱ)W% < 30%で中形態のもの及び漠然

又漠然とした刺激に対して多くの関心と興味をもったことは一般に優秀児の特性としての抽象的なものへの適応及び多角的な興味の存在と結びつくものといえよう。

なおベック Beck, S, Z, によれば知能の高いもの程Rが高いとRを知能指標の一つにあげており、クロッパは反応数の少ないものは非生産性を、豊かな反応数は成就と量に対する強迫的な欲求を示すと述べ、本明は「自我防衛手段としての反応生産もある」としている。いづれにもせよ他の要因を吟味するこ

での能力をうかがうものである。

全体反応と共に成人期まで増加の傾向を示し、知覚の発達段階を知る指標でもある部分反応は具体的、実際のな面

(表6) WのA.Q

	G I	G II	G III	計
41—50		1	1	2
51—60	1	1		2
61—70		1		1
71—80	3			3
81—90	4	1	1	6
91—100	4	2	3	9
101—110	5	1		6
111—120	4	1	3	8
121—130	2			2
131—140			1	1
141—150	1			1
151—160			1	1
計	24	8	10	42

知覚のもの、(三) W% \wedge 20% のものに区分して解釈仮説を与えている。

本実験児群の示したWの質については表6に示した如くG II 群は良形態を、他の二群は中位又は中の下位に属す。即ちG III 群はクロッパの云う(一)の範中にあり、他は(二)の場合に含まれる。

発掘・3 具体的、実際のな事実の把握が困難である。

(表4) W

	G I	G II	G III	計
1—5	1	2	2	5
6—10	4	2	2	8
11—15	6	2	3	11
16—20	3	0	3	6
21—25	4	1	0	5
26—30	5	0	0	5
31—35	1	1	0	2
計	24	8	10	42

(表5) W%

	G I	G II	G III	計
1—5			1	1
6—10			1	1
11—15	1	1		2
16—20	2	1		3
21—25	1			1
26—30	2	2		4
31—35		1	3	4
36—40			1	1
41—45			1	1
46—50	1		1	2
51—55	3			3
56—60	1			1
61—65	1	1		2
66—70	1		1	2
71—75		1		1
76—80	4			4
81—85	3			3
86—90	1		1	2
91—95	1	1		2
96—100	2			2
計	24	8	10	42

本実験児群の成績 33.3% は、同年令児群 76% に対し、W% とは逆に半数値である。これは成人の 45—55% より低いものである。この事は前述した実験児群の W% が高値を示したことに遡及するだろう。各群別においては D での G I 群と

(表 7) D

	G I	G II	G III	計
1—5	10	2	1	13
6—10	5	3	1	9
11—15	1	0	4	5
16—20	5	2	2	9
21—25	1	1	2	4
26—30	1	0	0	1
31—35	0	0	0	0
36—40	1	0	0	1
計	24	8	10	42

(表 8) D%

	G I	G II	G III	計
1—5	3	1		4
6—10	2		1	3
11—15	1			1
16—20	4	1		5
21—25	2	1		3
26—30	1		1	2
31—35	3	1		4
36—40	2			2
41—45	1		4	5
46—50	3	2		5
51—55		2	2	4
56—69	1		1	2
61—65	1			1
66—70				
71—75			1	1
計	24	8	10	42

(表 9) DのA. Q

	G I	G II	G III	計
61—70	1	1	1	3
71—80	3	1		4
81—90	3	3	2	8
91—100	7	1	1	9
101—110	5	2	3	11
111—120	2		1	3
121—130	2			2
131—140				
141—150			2	2
計	23	8	10	41

(註・G I 群の反応 0 の 1 例を除く)

G III 群との分散比が $\frac{26^2}{9^2} = 2.52$ で有意であり、D% では $\frac{16^2}{9^2} = 1.15$, $10 = 2.64$ で 2% の危険率で差のあることが認められた。又 D 反応における形態水準は W の場合に比べ僅少だが低値であり、G III 群のみが平均 106.3 の良形態を示した。

発掘・4 D 反応に見出される傾向は他の領域反応においても首肯される。

実験結果の平均 1.5、3.8% の d 反応に些細なことの無関心さ

を示すものと考えられ、又型にはまったことの出来ぬ独創的な人にみられるが、強迫的な完全癖の特徴ともみられる。優秀児群にあつて不思議でないロールシャッハ反応の一特徴といえるであろう。いづれ独創反応なども関連して考察したい。

(表10) d%

	G I	G II	G III	計
0	16	3	5	24
1-5	4	2	3	9
6-10	1	1	1	3
11-15	1	1	1	3
16-20	2			2
21-25		1		1
計	24	8	10	42

(表11) Dm%

	G I	G II	G III	計
0	6		1	7
1-10	10	4	3	17
11-20	6	3	5	14
21-30	1		1	2
31-40	1	1		2
計	24	8	10	42

(表12) S

	G I	G II	G III	計
0	8	3	5	16
1	8		3	11
2	1	2	2	5
3	2	2		4
4	1			1
5	4	1		5
計	24	8	10	42

発掘・5 S反応が散見出来ることから何らかの抵抗傾向があるものと考えられる。

表12に示す如く、G、I、G群に多くの空白部分反応(S)が見出せるが、辻らは「空白部分反応は知的な面での対立傾向とみられ、特にその大胆な使用はF⁺と結合するものが多い。しかもこの傾向は知的な能力が成熟すると共に著明になる。」と述べている。⁽⁶⁾

発掘・6 「神経症的収縮」に陥入り易い状態にある。

神経症的収縮とは知的には豊かな分化した反応をなし得るが形態についてあまりにも嚴重でありすぎるために、自分の内的欲求を認め、それに反応することや自分自身の情緒的な反応に従つて行動することが抑圧されていることで

ある。

本実験児群が示したFは児玉規準の同年令児群のものと変わらずF%も50%強で問題とすべき程のものではない。

(表13) F

	G I	G II	G III	計
1—5	2		1	3
6—10	6	1		7
11—15	3	2	2	7
16—20	5	2	2	9
21—25	3		4	7
26—30	2	2	1	5
31—35	1	1		2
36—40				
41—45	1			1
46—50				
51—55	1			1
計	24	8	10	42

(表14) F%

	G I	G II	G III	計
16—20	2		1	3
21—25	1			1
26—30	1			1
31—35	3			3
36—40			1	1
41—45	1	1		2
46—50	3		2	5
51—55	3	2		5
56—60	3	1		4
61—65			2	2
66—70	4		1	5
71—75		2	1	3
76—80	1	1	1	3
81—85				
86—90	1	1		2
91—95	1			1
96—100			1	1
計	24	8	10	42

(表15) F+

	G I	G II	G III	計
1—5	4		1	5
6—10	7	2	1	10
11—15	3	3	2	8
16—20	4	1	4	9
21—25	5	1	2	8
26—30		1		1
31—35	1			1
計	24	8	10	42

しかし、F反応の解釈においてその主柱をなすべきF⁺及びF%については高値を示し、特にG^{III}群はG^I群との間には分散の差を示し、又G^{II}群との平均値において $\frac{10}{22} = 1.31$ $t_0 = 2.46$ で5%水準で有意の差がみられた。

これらは本実験児群が彼等の行動や思考において感情的な面より知的面で解決しようとし、しかもそれが可成り厳格であるものとみることが出来る。特にG^{III}においては顕著である。

(表16) F₊%

	G I	G II	G III	計
36—40	1			1
41—45				
46—50	2			2
51—55	2			2
56—60	1			1
61—65	2	1		3
66—70	2	1		3
71—75	1	2	1	4
76—80	1	1	2	4
81—85		1		1
86—90	3	1	3	7
91—95	3	1	2	6
96—100	6		2	8
計	24	8	10	42

(表17) M

	G I	G II	G III	計
0	4	3	1	8
1	4	1	3	8
2	5	1	0	6
3	5	1	2	8
4	4	1	1	6
5	2	1	1	4
6			2	2
計	24	8	10	42

発掘・7 本実験児群の示した「M」より思考的活動の活潑さを見出し得る。

運動反応 (M) はロールシャッハ自身が知能、創造性、想像性及び情緒の状態との関係を論じて以来、多くの研究者たちによって追究されてきた重要な要因である。

クロツパーによれば、M反応には三つの主要な概念がある。即ち(一)想像の過程を含んだ運動感覚の投影、(二)人間という概念を通じた他人との共感、(三)高度の分化と統合の知

覚である。これらの概念から知能、想像、内的安定性、価値体系、自己受容性、共感性、自己概念等を論じている。

これらの概念は発達の考察を始めとして臨床的、統計的にも実証され、その妥当性が確認されつつある。

そこで本実験結果をみるに、全平均2.4は同年令児群の1.5に比し、Rの高さを考慮しても高いものであり、成人のそれと変わらない。しかも他の要因と異なり、その分散値も小さいことは、本実験児群におけるMの出現は各被験児に平均していることを物語るものであり、本実験児群の特徴の

一つとみてよいであろう。

勿論Mの考察にあたってはその形態の良、不良が吟味されることは云うまでもないが、本結果からみられる形態水

準は表18に示したごとく非常に高いものであり、Mの量とともにその質の高いことを示しており思考的活動の活潑さを語っている。

(表18)

MのA. Q					
	G I	G II	G III	計	
51-60		1		1	
61-70					
71-80			1	1	
81-90					
91-100					
101-110					
111-120					
121-130	4			4	
131-140	1			1	
141-150	2	2	1	5	
151-160					
161-170	1			1	
171-180	2			2	
181-190	2		1	3	
191-200	5		4	9	
201-210					
211-220	1		1	2	
221-230		1	1	2	
231-240	2			2	
241-250					
251-260					
261-270					
271-280					
281-290		1		1	
計	20	5	9	34	
平均	175.9	171.7	186.9	178.2	

(註 M反応のないものG I群4, G II群3, G III群1を除く)

(表19)

FM					
	G I	G II	G III	計	
0	4	1	3	8	
1	1	1	1	3	
2	2	1	1	4	
3	1	2	1	4	
4	3	2	1	6	
5	1		1	2	
6	1	1	1	3	
7	1		1	2	
8	1			1	
9	3			3	
10	1			1	
11	1			1	
12	1			1	
13	1			1	
14	1			1	
15					
16					
17	1			1	
計	24	8	10	42	

発掘・8 衝動性に対するコントロールが適度に行われている。

本実験の成績は平均4.8の出現で問題とすべき程でないが、各群別の平均については、GI群の平均が高く、M反応とは逆の結果を示している。FMの分散値もM同様に小さい。

動物運動反応はクロッパによって始

めて与えられたもので、FMの理論的背景は未だ十分なものではない。しかし臨床的経験からFMの出現は成人より児童に、成人でもより原始的なものに多い。即ちMとは逆の発達段階を示すものである。そこでその解釈も洞察や理解の欠けた衝動であるとしている。特にMとの比率において考察されるが本実験児群においては成人のそれにあり内的素質とバランスのとれた衝動性を示している。

発掘・9 適量の「無生物反応」が見出されることからパースナリテイの困難時には自己保存の努力が行われているものとみられる。

無生物反応(m)は言うまでもなく、緊張や葛藤あるいは抑圧しようとする欲求を示すものであるが、mが適量であることはパースナリテイの困難時に自己保存のための努力が行われているものと考えられる。

ピオトロスキー Piotrowski, Z, A, は知能の優れたものにも現われると述べているが、田中はこの見解に反証をあげている。⁽⁹⁾しかしパースナリテイの困難事態に際する自己保存の努力の現われであるということには言及していない。

本実験の結果にみられるm反応は平均1.6と普通児の平均より高いものである。各群間の相度はみられない。

発掘・10 色彩反応が全般に低く、特にFCが低いことから外的、情緒的な刺激に対する反応が少なく、情緒的混乱を示すものとみられる。

色彩反応は知覚における色と形の優位性が問題になる。一般に発達的には純粋色彩反応(C)―色彩形態反応(CF)―形態色彩反応(FC)の順序で出現するか或いは支配的であると考えられている。青年期乃至青年前期においてはFC・CF・C

(表20)

	m			計
	G I	G II	G III	
0	6	3	2	11
1	7	1	3	11
2	5	2	3	10
3	4	0	1	5
4		2	1	3
5	1			1
6	1			1
計	24	8	10	42

(表21) FC

	G I	G II	G III	計
0	11	4	5	20
1	5	4	5	14
2	6			6
3	2			2
計	24	8	10	42

(表22) CF

	G I	G II	G III	計
0	14	6	4	24
1	6	1	3	10
2	4		1	5
3				
4		1	1	2
5			1	1
計	24	8	10	42

(表23) C

	G I	G II	G III	計
0	22	6	9	37
1	1		1	2
2		2		2
3				
4				
5	1			1
計	24	8	10	42

の順序で出現をみる。

これから色彩反応は外界からの影響を統合する手腕を求める環境からの情緒的衝撃に反応する方法を指示するものと考えられる。

FC は形態を主に、色彩を二次的に考慮しているという観点から、感受性を無くさない程度に情緒的な衝動を容易にコントロールしている一般に高い程度の統合反応である。青年前期では1~2の出現をみる。

CF は形態より色彩によって影響づけられたものとして、社会的な現実場面での制御に難点はあるが適切で純粋な情緒的反応を表わす。青年前期においては平均一つのCFをみる。

C は反応の決定が色彩のみによってなされ、形態に考慮が払われていないもの。情緒的なコントロールに欠け、衝動、情緒の爆発性を示す。正常人には殆んどみられない。

以上の解釈仮説をもとに、本実験児群の色彩反応の成績を発掘考察すれば全平均 $FC = 0.8$ $CF = 0.8$ $C = 0.3$ である。

(表24) FC : CF + C

	>	<	=	0	計
G I	10	6	2	6	24
G II	2	2	0	4	8
G III	1	4	3	2	10
計	13	12	5	12	42

の値が低い。なお個別的な検討では FC : CF + C のバランスにおいて、FC の優勢なもの13、劣勢なもの12、アンビバレントなもの5例となっている。各群別成績ではG I群の色彩反応平均が最も常値に近く、G、II、G III群ではFCの値が低い。又個別的にバランスを検討しても、表24のようにG III群ではFCの優勢なものが僅かに一例しかない。

発掘・11 反応事態に際しては外面的なものより想像機能を働らかして解決していくものが多い。

色彩反応と運動反応との相互関係即ち体験型 (M : C : M) において性格類型学的に内向型、外向型に分類出来る。ロールシャッハによれば前者は抽象的、理論的、想像的な人に多く、実際の活動的な人には後者に属するものが多いという。

本実験児群の成績では、内向型のものが優を占め、共貧型がこれに続いている。

発掘・12 反応内容において人間反応が高いことから対人関係が豊かであるとみられる。

意味づけの背景の広さを示すものとされている。優秀児群の内容分析は特に興味ある部分であるが、ここでは動物反応(A)、人間反応(B)の成績による考察にとどめる。

(表25) 体験型 (E C : M)

	G I	G II	G III	計
共貧型	6	3	3	12
外向型	3	2	1	6
内向型	11	3	5	19
共豊型	4	0	1	5
計	24	8	10	42

(表26) A%

	G I	G II	G III	計
26-30	2	2	1	5
31-35	3	1	1	5
36-40	7		2	9
41-45	2	1	1	4
46-50	5		2	7
51-55		2	1	3
56-60	1	1	1	3
61-65				
66-70	4	1		5
71-75				
76-80				
81-85				
86-90			1	1
計	24	8	10	42

(表27) H%

	G I	G II	G III	計
0		1		1
1-5	1			1
6-10	5	4	2	11
11-15	5	1	4	10
16-20	5			5
21-25	2	1	1	4
26-30	3		1	4
31-35	2		1	3
36-40	1	1		2
41-45			1	1
計	24	8	10	42

A 反応は一般に出現し易く、四才児位で平均5の反応をみ、年令とともに増加して青年前期群では10-15、25-45%の出現をみる。

一方H反応は六才位から平均1の反応をみて順次増加の傾向をみるが、青年前期で2-3、常人で3-4の出現数
があげられている。

本実験児群の結果から、A%は一般的な範中であり、H%は比較的高い出現を示しており、他人に対する関心や感受性の豊かさを物語るようである。

四 要 約

以上はロールシャッハ・テストの主要因子における優秀児全体及び知能段階別各群の結果ならびに一般的解釈による

考察であるが、全体としての実験結果を概括すると、反応領域においては全体反応が高く、部分反応がかなり低い。形定因ではF%がやや低値で、人間運動反応がかなり高い出現を見ており、動物の運動反応は大体普通児の範囲内にある。しかし無生物の運動反応は幾分高い傾向にある。色彩反応はその出現頻数が少なく、純粹色彩反応は殆んどものみられなかった。体験型は大体半数が内向型を占めている。尚F+%は高く、W、Dにおける形態質は平均値を示し、Mの形態質は相当高いものである。人間反応は高値の傾向にある。

上述の結果を解釈すれば以下の如くである。

テストに対する態度は受容的・積極的で拒否的な状態はみられず、活潑な生産態度である。W反応及びD反応の質と量から組織化に強い関心をもっているが、実際の、日常的、常識的なものへの関心の無さがうかがえる。特にWとMとの比率においては組織化への成就要求がその裏付けとなる創造的、生産的エネルギー以上に強力であり、過度の野心と欲求水準の高さがうかがえる。しかも空白反応が散見でき、これらの欲求は自己の能力を過信し、頑固に主張しようとするために起因しているものと考えられる。F%の形態水準が高く『神経症的収縮』に陥入り易い状態にある。人間運動反応よりは知的素質の良さがうかがえるが、他の成績よりみて創造的生産量は深い内的経験よりも知的努力から確立されたものであり、達成欲求と基本的欲求とのフラストレーションの補償とみられる。しかも適量の動物反応がみられることから、衝動性と内的素質のバランスがとれており、内的葛藤もなく、欲求不満に対するコントロールが出来ているようである。更に人格の構造の統合を破壊しない程度の無生物反応がみられることは、葛藤や緊張に際しても自己の体系保持に努力していると考えられる。色彩反応より外界の情緒的衝撃に対する反応は一応均衡を保ってはいるが、情緒的刺激に対しての反応が少なく、情緒面での制禦が過剰である。

ロールシャッハ・テストにおける体験型の解釈に従えば優秀児には内向性を示すものが多い。即ちすべての面で想像

機能がよく発達し、外面に対する反応度や介入が少なく、自己流に解釈し再構成していく。内容分析における人間反応の頻発はM反応と考え併せて他人とのよい共感関係をもつことが出来るものと考えられる。

これを要約すれば、本質的に知的素質の優秀さがうかがえるが、自己の能力を過信し、主張しようとする態度即ち過度の知的な野心をもち、日常的、実際の、常識的なものを無視し個々の事実を一般化しようとの強迫的なまでの達成欲求をもっている。しかしこのような欲求達成に対する葛藤や緊張はみられず、むしろ自己の体系を保持しようとする努力をしている。そのためにも、外的な刺激に対してはよくコントロールして対処しようとするところがあり、他人との接触においてもよい関係にあるといえる。

知能段階別群の概括をするならば、G^{III}群即ちQ^{I.140}以上のグループが分散値も小さく、よくまとまった成績をおさめるとともに、その平均値は他の二群と比べ各要因においてかなりの相異を示した。

以上の点からG^{III}群のパーソナリティ像は優秀でしかもよくバランスがとれている。他の二群については決して悪い状態ではないが、その個人差が顕著であり個々の成績を吟味する必要がある。

- 註(1) Lange-Eichenbaum, W. Das Genie-Problem. 1941. 島崎敏樹、宮本忠雄著「天才と狂気」昭和三五年 金子書房
- (2) Terman, L. M. : Genetic Studies of Geniut, Vol 1. p. 519-555.
- (3) Witry, P. A. : A Genetic Study of 50 gifted Children, Yearb, nat. Soc Stud. Educ. 39 1940.
- (4) Hildreth, G. : Characteristics of Young gifted Children, I. gent, psychol, 53, 1938.
- (5) 大伴 茂「日本天才児の心理学的研究」昭和三六年 弘文堂
- (6) 鈴木治太郎「優秀知能児はどんな親から生れるか」昭和二十七年 東洋図書
- (7) 森 重敏「知能優秀児の特性に関する基礎的研究」昭和三四年 教育心理学研究 第七卷 第三号
- (8) 辻 悟他「ロールシャッハ・テストの間隙反応について」昭和三三年 牧書店 ロールシャッハ研究 I

(9) 田中富士夫「ロールシャッフの運動反応と知能との関係」昭和三三年 教育心理学研究 第六卷 第一号

主要参考文献

- (1) Klapfer, B., Ainsworth, M. D., Klopfer, W. G., & Halt, R.R., : Development in Rorschach Techniqus Volume I. Techniqut and Theory, 1954.
- (2) 片口安史「心理診断法」—ロールシャッフ・マスト— 牧書店 昭和三一年